個人史からみた大阪市西淀川区における地域環境の変容過程

Deterioration of Natural Environment Found through the Transferring the Inhabitants' Awareness in their Life History in the Nishiyodogawa Ward, Osaka

神吉紀世子* 若生謙二** 宗田好史***

Kiyoko KANKI Kenji WAKO Yoshifumi MUNETA

摘要：本研究では、都市近郊の農漁村から日本有数の公害地域へと環境の激変した大阪市西淀川区を対象に、居住者個人の記憶の蓄積に着目し、ヒアリング法により公害の被害の進展と自然環境・自然遊びの減少の関係をとらえ、環境変容の過程とそれに対する意識の発掘を試みた。その結果、遊びの変化と公害への意識の変化について、昭和10年頃以前、昭和10年代～30年代半ば、昭和30年代後半～40年代、昭和50年代以降、の4つの時代区分に応じた遊び場所や自然遊びにおける自然との関わりの変化、公害被害への意識の違い、地域環境の変容の契機に特徴がみられた。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

1970年代に全国各地で起こった公害訴訟が近年相次いで結審し、産業公害地域は新たな局面を迎えている。本研究でとりあげる大阪市西淀川区では1995年に被告企業と1998年に被告である国・道路公団との和解が成立し、1995年の和解条項で原告である大阪西淀川公害患者と家族の会（以下、患者会と略す）らは解決金の一部を「西淀川地域の再生などの実現に使用する¹⁾」とされたのに従って、1996年、財団法人公害地域再生センター（以下、財団と略す）の設立が環境庁によって認可され、地域の環境再生にむけての活動が進められている²⁾。

財団は、公害発生源対策や汚染浄化にむけた研究を主催する等の活動と同時に「患者と地域住民の参加による再生³⁾」を提起し、失われた水や緑との触れ合いのある潤いある暮らしの再生を目指している。全国の産業公害地域でも様々な環境再生の取り組みが行われているが、このような地域の環境と生活の関わりを公害地域で再生する取り組みは緒についた所であり、地域住民が主体的に取り組み始めたという点で西淀川は先駆的試みと位置づけられる。本研究は西淀川区においてこの再生手法を模索するために、居住者の記憶する過去の環境と生活の関わりに着目しその記憶情報の中から再生目標を見出す手法を試みて取り組んだものである。

西淀川区は、明治・大正時代までは自然の豊かな農漁村地域であった。その後工業化・市街化の中で地域環境は激変してきたが、居住者はその激変の過程を自らの生活の歴史とともに記憶しており、再生すべき環境をかつての体験の記憶の中から見出すと考えられる。記憶されている体験が、どのような環境の中でなされたか把握できれば、今後の取り組みにも活用可能な地域資源として有用と考えられる。そこで本研究では、居住者の個人史と変化する地域環境との関わりに注目して西淀川区の地域環境の変容過程を明らかにすることを目的とし、得られた過程から環境再生への手がかりを考察することとした。

(2) 分析の方法

地域の生活と環境の関わりを探る視点の1つに、子供の戸外遊びに着目する視点がある。例えば、地域計画分野で木下ら⁴⁾、地理学分野で寺本⁵⁾の三世代の遊びの変化の研究がある。これらにおいて、子供の遊びは環境の変化を反映すると指摘されていることから、本研究も居住者の子供時代の遊びに着目することとした。

個人史の記憶を口述法によって描き出す生活史法の取り組みは、主に社会学において個人を捉える方法として発達してきたが⁶⁾⁷⁾、それらの手法を用いて居住者の個人史から地域分析を捉えるアプローチが生活学等の分野でみられている⁸⁾⁹⁾。生活史法では記憶をひきだすためヒアリングが重要な方法になるが、それに対しては調査者と被調査者の相互関係によって口述内容が規定されることや、一般化の困難さや代表性に欠ける等の指摘もみられる⁶⁾。しかし、ヒアリングの意義はアンケートなどの定型的設問では得ることが困難な情報を入手でき、量的調査や統計的方法では得られ難い被調査者の主観的領域や複雑な口述内容に迫りうることにある⁶⁾¹⁰⁾。本研究では、定型的設問では得ることが困難な高齢者を中心とした居住者の記憶を取り扱うため、ヒアリングの方法を用いることが適当であると考えた。

ヒアリングは集団ヒアリングと個人ヒアリングの二段階で構成し、1996年12月から1997年8月にかけて行った。はじめに西淀川の7つの地区¹¹⁾ごとに患者会から推薦された居住歴の長い高齢の77名の居住者¹²⁾を対象に、地区の変化の概要についての集団ヒアリングを行った。次に集団ヒアリング対象者の中から個人史についてのより詳細なヒアリング対象者となることを承諾する個人ヒアリング対象者を募り、さらに各地区の歴史に詳しい患者会以外の居住者の紹介を得、28名の個人ヒアリングを行った。

個人ヒアリングでは、公害地域としての西淀川の環境変容の過程とそれに対する意識を発掘するため、①西淀川での生活歴、②環境と自然遊び¹³⁾の変化、③公害の実態と被害についての意識の変化、の3つの観点からの聞き取りを行った。見やすく拡大した過去の地形図と西淀川の主な出来事を記した年表を持参し、被験者の自宅で生活歴を尋ねながら、平均2時間の調査時間で②と③についての口述を得る方法をとった。得られた口述内容はその場で口述者とともに地形図・年表と照合し、口述内容の確実性を検証し正確性の確保に努めた。その結果、上記の3点に関する口述とともに、地域変化の具体的な位置の指摘を地形図上に得た。

分析の手順は、始めに客観資料である過去の地形図¹⁴⁾と文献資料¹⁵⁾¹⁶⁾により西淀川区の明治末期以降の歴史的变化の概要を把握し西淀川区の土地利用変化からみた環境の変容過程の時代区分を行った(2章)。次に上述のヒアリング結果(3章)をもとに客観資料から得られた時代区分に対応した地域環境の変容を解説・検証し(4章)、環境再生の取り組みに関する考察を行った(5章)。

*和歌山大学システム工学部環境システム学科 **大阪芸術大学芸術学部環境計画学科 ***京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科

図-1 地形図から得られる西淀川区の土地利用変化

2. 地形図からみる地域環境の変容過程

大阪市西淀川区は、新淀川河口に北接する、面積約14km²、人口約9万1千人（平成7年）の区である。本章では、新淀川が建設された明治42年以降の西淀川区の地域環境の変容について、地形図及び文献資料から把握する。なお、昭和18年に区域が変更されるまでは新淀川をはさんで南側にも一部西淀川区があったが、ここでは現在の西淀川区の区域を対象としている。

地形図から土地利用の変化を把握した。これらの地形図のうち変化が顕著にみられる特徴的なものを示したものが図-1である。これにより全体の傾向をみると、①明治44年（1911）には工場立地は少なくこれ以降急増する、②昭和6年（1931）には多くの農地がみられたが昭和22年までの間に激減する、③昭和22～30年（1947～55）には農地ではない空地が多い、④昭和30～44年（1955～69）の間にほぼ市街化が完了する、ことが確認される。

このような土地利用が変化する過程で生じた主な出来事を文献資料に求めると、明治44年は西淀川区の大阪市編入（大正14年）の前で新淀川建設（明治42年）の直後にあたり、この時点で既に工場が大和田や福で既に汚染問題を起こしている¹⁷⁾。昭和6年は大阪市編入、国道2号線開通（大正15年）後、室戸台風（昭和9年）の直前で、西淀川区各地区で工場による汚染のための農業被害に関する裁判や補償問題が生じている¹⁸⁾。また、昭和3年頃から姫島、佃、竹島、御幣島で土地区画整理事業が始まる¹⁹⁾。昭和22年は室戸台風（昭和9年）、戦災（昭和20年）の被災後であり、昭和30年までの間にはさらにジェーン台風（昭和25年）の被害がある。昭和44年は西淀川区の人口が過去最高の12万人（昭和40年）に達した直後で最も人口が多く過密だった時期と考えられ、国道

43号線（昭和45年）や、阪神高速（昭和44年）等の広域幹線道路の開通直前である。全国的にも公害対策基本法の制定（昭和42年）にみるように公害が最も激甚化していた時期とみなされる。その後大野川が緑道となる（昭和54年）等のように環境改善の取り組みがみられるようになる。以上のように、上記①～④に対応するような出来事があったことがおおそ把握される（表-1）。すなわち：

- ・大阪市編入のころから工場の進出が増える。
- ・工場と農地が共存していた昭和6年頃既に、工場からの汚染による農業被害が生じていた。
- ・昭和6～22年の農地の激減には水害や土地区画整理事業の実施が影響している
- ・戦災や水害の頃、空地はあ

たが農業は復活せず後に宅地化されるのみであった。

- ・昭和30年以降急速に市街化が進み、昭和40年代前半にはほぼ全域が市街化して空地は激減し、この頃公害も激甚であった。

以上、地形図にみる土地利用の変化と区内での出来事から、明治末期～現代までを、A：農漁村時代＝昭和10年頃まで（農業地域で工場公害との軋轢もみられた時代）→B：空き地の時代＝昭和10年代～30年代半ば（農業の衰退、区画整理等による、空き地が多く現れた時代）→C：市街化と公害の時代＝昭和30年代後半～40年代（市街化の進展と公害の激甚化がみられた時代）→D：公害緩和の時代＝昭和50年代以降（公害緩和の対策がとられるようになる時代）の4つの時代に区分することが想定される（表-1）。

3. 個人史からみた地域環境の変容

本章では、28例の被験者に対して行った個人ヒアリング調査の結果について述べる。表-2に被験者の個人史年表を、表-3に口述内容を地区ごとにまとめて示した。以下の文中では、紙面

表-1 西淀川区における土地利用変化と主な出来事

（地区別の表中、斜体字は地形図からよみとれる変化を、普通字は文献から得られた出来事を示す）

年 表（西淀川区に関わる主な出来事）	中島	佃	大和田・出来島	福・大野	姫島	柏花	竹島・御幣島
大正時代以前	M42(1909) 新淀川ができる		工場公害紛争がおこる				
昭和1～9年	T14(1925) 大阪市に編入（西淀川区となる） 工場地域に地域指定 T15(1926) 国道2号線（阪神国道）開通	工場公害紛争がおこる（農民補償）	工場の立地	工場の立地	工場の立地	工場公害紛争がおこる（農民補償） 地埋め立て	
昭和10年代	S9(1934) 国鉄（JR）塚本駅開業 S9(1934) 室戸台風	水・害	水・害	水・害	水・害		
昭和20年代	S20(1945) 戦災（空襲） 区人口約4万人		戦災 区人口約4万人		戦災 区人口約4万人		
昭和30年代	S25(1950) ジェーン台風 区人口約9万人	水・害	水・害	水・害	水・害		
昭和40年代	S36(1961) 第二室戸台風 区人口約12万人		水・害		水・害		
昭和50年代以降	S42(1967) 公害対策基本法 S44(1969) 阪神高速道池田線開通 S45(1970) 国道43号線開通 S48(1973) 公害健康被害法制定 S54(1979) 大野川緑陰道路完成	中島工場 団地の建設			急激な市街地の増加	急激な市街地の増加	

凡例：地形図における土地利用面種別合 土地区画整理事業の実施 = 事業組合認可～解散
0 河川を除く西淀川区全域=100%
農地 高密度市街地 高密度でない市街地 工場用地 農地でない空地 湿地 水没地

表－2 被験者の個人史年表

の都合から口述内容が類似・重複している事例を省略している。なお、文中の被験者の年齢は平成9年11月時点のものである。

①中島地区 事例1 (男性84才：大正2年中島生まれ)：農業を生業とするが、昭和9年の室戸台風と地盤沈下による海水の逆流のため農業ができなくなり、工場勤務に転業する。

大正時代の中島は農村で、瓜、大根等を栽培していた。耕作のない日は、老人と子供は牛を朝に川の堤防に連れていき夕方に迎えにゆく事が日課であった。水路のシジミは夕食のおかずで、秋には神崎川でハゼを釣った。中島川沿いの松林で風呂たきつけ用の松葉をとる。神崎川は既にドロドロであったが夏はほとんど毎日泳いだ。水路でボラとり等をした。室戸台風後農業ができなくなり、川も人工護岸になり自然環境がなくなる。堤防が高くなり水遊びもできなくなる。その他ビー玉や木の枝を土に立てる遊び等が主な遊びであった。大正末期には既に製紙工場の廃液で川は真っ赤に汚れ、泳いでいた子供は糞を着たようになる。昭和9年頃から鉄鉱石製錬の際に出る黄色の煙の被害が悪化。晴天時には煙が上がり悪天候時には煙が地上を這い、畑の野菜の表面が縮れ商品価値がなくなる。錆びがひどいため雨水を流す樋は竹に変えた。会社へ被害対策の交渉に行く。室戸台風では約40日間浸水。この頃から地盤沈下の影響で海水が逆流し塩分で農業ができなくなる。昭和9年頃からの製錬の被害は、近年の自動車排ガスの被害をはるかに上回っていた。中島で生まれ育った者は免疫ができていて喘息は少なく公害患者は新住民に多いように思う。昭和23年頃には製錬の煙は徐々にささる。水害復旧の堤防工事、農業の廃業、製錬被害の始まり等、昭和9年を境に風景が変わった。

事例2 (女性47才：昭和27年中島生まれ)：昭和30年代、中島は一面が田畑で昭和39年頃から雰囲気が変わったが、生まれた時から汚染された環境であったので、気にならない。

事例3 (女性46才：昭和27年中島生まれ)：昭和30年代には戦争で破壊された大同製鋼の建物が子供の遊び場であった。

事例4 (女性46才：昭和26年中島生まれ)：昭和30年代の小学校時代には、田畑、空き地、五社神社境内で遊び、子供を育てた昭和50年代には虫取りや野球に中島公園につれて行き、公害被害に対しては、生まれた時から環境で気にならなかった。

【考察】大正時代の少年期の遊びの中心は、水泳と魚とり等の川遊びである。当時の中島は農業地帯であり、放課後のほとんどの時間は畑の手伝いや川遊び等、野外で比較的広範囲に移動して過ごしている。また、移動を伴わないものでも、土の地面を利用した遊びが多い。大正末期に既に神崎川に廃水が流され、あまり汚染を気にかけず川遊びが行われていた。

事例1の被験者にとり、昭和9年の変化の意味は大きい。製錬の被害に対する意識が強くあらわれ、農業を継続できなくなったという生活上の変化とともに、これが本格的な大気汚染の被害として認識されている。事例2, 3, 4は同世代であり、昭和30年代の小学生時代には田畑で遊ぶが、子供の世代になる昭和50年代には野外での遊び場は公園に変わる。

②大和田・出来島地区 事例1 (男性76才：大正12年大和田生まれ)：商店街の炭屋に生まれる。昭和初年頃、隣接する出来島は湿地帯で昭和5年頃まであった社寺林が遊び場だった。神崎川の堤防の土手は松林でタンポポが咲き花見に行く。昭和25年のジェーン台風後にコンクリートの堤防が設置されてから川には行かなくなる。昭和30年代から植木の枯損がめだちキンモクセイが咲かなくなるが、近年咲き始める。

事例3 (男性49才：昭和23年大和田生まれ)：小学生時代の遊び場は大和田川埋立中の土砂置き場だった。河口に砂浜と港と社があった。池沼が多くフナ等をとり、草原や小学校裏の原っぱで草遊びや相撲をする。昭和60年代初頭、自身の子供は原っぱのまま残っていた大和田川の埋め立て地で遊ぶ。大和田商店街付近はよく集中豪雨で浸水した。昭和40年代空が黄色にそまり洗濯物が黒くなる。昭和55年に嫁してきた妻は川の悪臭を指摘した。

【考察】神崎川に接する地区であり、昭和初期には川の土手や社寺林が遊び場であったが、ジェーン台風後にはこれらが消失し、埋め立て地や池沼が遊び場になる様子がわかる。戦災の大きかった大和田地区では、昭和23年に戦災復興区画整理事業の仮換地が始まり昭和34年に事業が終了する。この時期に少年期を過ごした事例3では既に川遊びから離れ空き地での遊びが中心になる。

③福・大野地区 事例1 (女性77才：大正9年大野生まれ)：昭和初期には淀川の堤防を通過してツツジの花見にゆく。付近では野菜畑、蓮池、湿地がみられた。昭和20年代、子供は空き地や池で遊ぶ。昭和15年頃既に工場から黄色い煙がみられた。昭和30年頃から40年代後半までが最も空気が悪く、窓を開けるとすぐに赤い灰がつもり、テレビのアンテナも腐食する程だった。

事例2 (女性56才：昭和16年大野生まれ)：昭和25～30年頃は淀川の閘門付近でザリガニ取り、路地でビー玉遊び等をした。昭和50年頃子供は近所の材木置き場で遊んでいた。昭和25年頃、通学路沿いの大野川は既にどぶ川で通学路も赤茶色であった。昭和30～40年頃は工場の煙がひどかったが子供は外で遊んでいた。

事例3 (男性78才：大正8年大阪府生まれ)：9才で大阪市外から福に転入。神社の木から大野川にとびこみ泳いで遊ぶ。洗濯は川で行い、小学校の水泳は矢倉海岸で泳いだ。昭和9年の室戸台風では福は2カ月間浸水、さらに昭和25年のジェーン台風の被害の後農業従事者は減少する。子供の遊びは、昭和20年頃まで境内・堤防でのビー玉等、境内を中心に町なかで遊ぶこと

表-3 地区別にみた地域環境の変容と時代区分との対応
(凡例: =川や水辺に関わるもの =農業農地に関わるもの =空き地に関わるもの)

地区	A: 農漁村時代 (～昭和10年頃)	B: 空き地の時代 (S10年代～30年代半ば)	C: 市街化と公害の時代 (S30年代～40年代)
中島	<p>＜生活と環境＞ 農業(野菜)/農家の牛、堤防につれていく、草取り/水路でジミ・神崎川で焼く/中島川沿い松林/</p> <p>＜子供の遊び＞ 神崎川で泳ぐ/水路でボウ・うり・とり/</p> <p>＜公害の意識＞ 大阪連合製紙の廃液で川の水質汚染(大正末期)/神崎川の水質汚染/鉄鉱石精錬の黄色い煙の被害悪化(S9年頃)/悪天候下で煙が地を這い農業被害、鉄がさびる/会社と被害対策の交渉</p>	<p>＜生活と環境＞ 室戸台風/堤防工事で川は人工護岸、堤防が高くなる/川の水が溢れそう/現中島公園は葦原で近づけない怖い所</p> <p>＜子供の遊び＞ 畑の手伝い・牛の世話/川で水遊びできない/学校にプールができ川で泳がない/メダ、バイ、ビ・玉、木の枝を土に建てる/戦争で壊れた大同製鋼(地下の水たまりにメダ)で遊ぶ(S30年代)/田畑、空き地で遊ぶ、落とし穴・学校ごっこ/五社神社の境内/</p> <p>＜公害の意識＞ 室戸台風で浸水/地盤沈下/海水の逆流で農業衰退/佃から煤煙/戦後精練の煙緩和(S23年頃)/水路に家庭排水・油(S30年代)/汚染に慣れていた</p>	<p>＜生活と環境＞ S30年代には、夏休みに公害(高野山や淡路島)に出かける/川北小学校移転(S39年)頃からバラックが建て替わり始める</p> <p>＜子供の遊び＞ 中島公園で野球・虫とり</p> <p>＜公害の意識＞ (S50年代～) 近年公害は徐々に緩和</p>
佃	<p>＜生活と環境＞ 田養神社の森/川沿いはア原だった/田畑、野井戸があった</p> <p>＜子供の遊び＞ 川で泳ぐ、魚つり</p> <p>＜公害の意識＞ 工場廃液が川へ</p>	<p>＜生活と環境＞ 田畑が減少/田養神社の森・社殿が戦災で消失/ジェン台風で浸水</p> <p>＜子供の遊び＞ 川遊びの衰退</p> <p>＜公害の意識＞ 工場廃液で川汚染/工場増加・煤煙・車排気ガスの(S25年頃)金属がさびる/うがい薬</p>	<p>＜生活と環境＞ 空気の良い郊外へ行楽にくく/子供に体を鍛えさせる</p> <p>＜子供の遊び＞ 外で遊ばない</p> <p>＜公害の意識＞ 悪臭・神崎川汚染悪化</p>
大和田 出来島	<p>＜生活と環境＞ 出来島は湿地帯/周辺は米作/お花見/神崎川堤防に松並木神崎川堤防は土手、カボネがあった</p> <p>＜子供の遊び＞ 出来島の神社跡の森で遊ぶ、せみ(～S5年)/遠足で堤防/沼や川でカメ、モロ、トンボとり</p> <p>＜公害の意識＞ S6年頃から工場が増える/尼崎の発電所・日本化学の煙/日産化学の亜硫酸ガス/</p>	<p>＜生活と環境＞ 戦災でほとんどの集落を焼失/神崎川で魚がつかれた(S24年)/原っぱが多く家はまばら/大和田川河口は砂浜・森があった</p> <p>＜子供の遊び＞ 大和田川埋立中の土砂置き場、トロッコ/池でフナ、カメ、ザリガニとり/中島で釣り/原っぱでトボ、バグ、相撲/大野川77原草遊び</p> <p>＜公害の意識＞ 近所の工場の騒音煤煙(S20年代)/浸水しやすい/第二室戸台風で浸水</p>	<p>＜生活と環境＞ 神崎川沿いの桜並木、花見/第二室戸台風の後虫取りの場所がなくなる</p> <p>＜子供の遊び＞ 大和田川埋立地の残った原っぱ</p> <p>＜公害の意識＞ 近年(湾岸線開通後)、車の振動や排ガス悪化(淀川通り)/黄色い煙/煤煙</p>
福・ 大野	<p>＜生活と環境＞ 淀川大野川に漁師の舟だまり/大阪湾が漁場/大野川土手は貝殻の捨て場/付近の農家が振り売り/夕方に草を焚いて屋内の蚊ををいぶす/貝、パンダ、イシヤの料理/淀川堤防のレンガやカボネ/大野川で洗濯・野菜洗い(飲み水には使わない)/矢倉海岸に松並木/ツツジ、菜の花見(堤防)/盆踊り・淀川へ舟で精霊流し</p> <p>＜子供の遊び＞ 広っぱでけんか、こままわし/淀川で泳ぐ/とりもちざおでギンヤメ等を取る/田のイナゴの醤油焼きがおやつ/大野川に神社の木から飛び込む/農業用水路でトボ・とり/小学校の授業で矢倉海岸で泳ぐ/大野川水門あたり、77の卵盗み/町中でカメ・ビ・玉・かくれんぼ</p> <p>＜公害の意識＞ 工場ばい煙/ご神木がかれた</p>	<p>＜生活と環境＞ ジェン台風で被害/復旧工事で淀川堤防も高くマカント化/近くの広っぱで盆踊り/だんじり/夕方に雑草を焚いて屋内の蚊ををいぶす</p> <p>＜子供の遊び＞ 広っぱ、空き地や家、雑草地で遊ぶ/小さなトボ・カメ、をとる/淀川で泳ぐ/淀川の関門あたりでザリガニ取り/大野川でトボ・とり/町中や境内、堤防でメダ、ビ・玉、かくれんぼ、かんけり、おはじき、バグ、紙芝居やゴム飛び縄跳び/ステッキ等/近所の大きな家のイシヤをもらう</p> <p>＜公害の意識＞ 工場の煙(大野、戦時中)/大野川が汚れ始める(大野、終戦後)/福崎周辺で工場の煙・空気の汚れを感じた(福、S20年代末)/洗濯物や屋内の量が真っ赤に染まる(S30年代～)</p>	<p>＜生活と環境＞ 広っぱに社宅が建つ(福)/大野川が埋め立てられる/淀川は危険なので行くなと言われた(S40年前後)</p> <p>＜子供の遊び＞ 近所の資材置き場でカメ取り/男の子は危険だが淀川に行く/女の子は引き潮の淀川に行く/S50年まで砂っぱ、材木置き場で遊ぶ</p> <p>＜公害の意識＞ 大野川の汚染悪化、メダガス、不法投棄(埋立直前)/窓をあけると真っ赤な灰がつもる/家の中で寝ている子供の顔にすすがついたり、テレビのアンテナがくさる</p>
姫島	<p>＜生活と環境＞ 運河に舟/農村地域/菜種畑/水路がめぐる・水門があった/淀川堤防は土手、77原</p> <p>＜子供の遊び＞ 松岡紡績跡地で少年野球練習(大正末)/社寺境内、せみとり等/淀川、77、池でジミ・魚とり、泳ぐ/イナゴとり/とりもちでトボ・とり/産みを見る/桑の実、イシヤ、水路にカメ</p> <p>＜公害の意識＞ 大小工場(～S10年頃)</p>	<p>＜生活と環境＞ 戦後一時的に工場停止し川がきれいになり/S30年頃以後水路埋立道路化/77なくなる(S20年代)/空き地減少・住宅増加(S30年代)</p> <p>＜子供の遊び＞ 淀川で魚、ツツジとり、ボート遊び、カメ取り(S10年代～)/風呂屋の焼け跡、路地、原っぱ・空き地で野球/ステッキ草/イシヤ、柿の木/淀川堤防カボネ・摘み、花火大会、夕涼み/空き地減る、路地、神社境内で遊ぶ/</p> <p>＜公害の意識＞ S20年頃工場地帯(2丁目)では煤煙・悪臭ひどい/S30年代大野川水質悪化/S30年代後半空気悪く郊外へ家族で遊びに行く/</p>	<p>＜生活と環境＞ 行商なくなる/近所づきあい希薄化/淀川水泳禁止(S40年代末死亡事故)</p> <p>＜子供の遊び＞ お花見の苗(S30年代後半)/S40年代後半遊べる場所がない</p> <p>＜公害の意識＞ S35年頃～5分も歩けない程の空気・2丁目は大気汚染緩和/車増加/S40年代～前栽の花が咲かない、どんより、風が治らない/交通量増える/煤煙・悪臭(近年:淀川でバグ、カメとり(孫をつれて、S60年頃)</p>
柏花	<p>＜生活と環境＞ 田、菜の花畑/水路/湿地/野里、大きな蓮池があった→S8年埋立原っぱとなる/工場も散在</p> <p>＜子供の遊び＞ 水路で舟/田、トボ、穴ほり/埋立用トロッコ/カボネつみ/コマ回し/池埋立跡原っぱ、自転車/グリーコ工場でおかしをもらう</p> <p>＜公害の意識＞ 大野川悪臭、汚れ、滞留</p>	<p>＜生活と環境＞ 建物疎開跡の空き地に畑(S22年頃)/空き地多い/工場増加(S27年頃～)/長屋増加</p> <p>＜子供の遊び＞ 水たまりに板つかべる/神社の広場、池にカメ、トボ、カボネ、鬼ごっこ、かくれんぼ/淀川でカメとり/郊外の遊園地に行楽/淀川、泳ぐ/淀川通り行き止まりの道路で遊ぶ、盆踊り/家の裏の路地、鬼ごっこ、もちつき/原っぱ・花、草、虫/JR沿いの水路、ザリガニ/淀川は親といき子供だけでいらない</p> <p>＜公害の意識＞ S10年頃大野川悪臭/未舗装道に車増加で砂埃</p>	<p>＜生活と環境＞ 水路がなくなる(S45年頃～)</p> <p>＜子供の遊び＞ 子供の遊ぶ姿減る/花川公園</p> <p>＜公害の意識＞ 空気が悪いと感じる、子供に咳(S40年代)/ノス(S48年頃)/空気の变化感じない(野里)/車が増える</p>
竹島 御幣島	<p>＜生活と環境＞ 神崎川は77原だった/水路にはカボネ/砂で豆を売る行商がきた/浸水しやすい所/イシヤ畑があったらしい</p> <p>＜子供の遊び＞ 道路でゴザをひいてままごと、水浴びをしていたとのこと</p>	<p>＜生活と環境＞ 川と田と工場/戦中小さい軍需工場が多い/S20年代はじめ神崎川沿いは空き地/未舗装道路/浸水しやすい、JR下排水悪い</p> <p>＜子供の遊び＞ 家のまわりで遊ぶ/空き地、路地でカメ、カボネ、釣、水浴び/水路で遊ぶ</p> <p>＜公害の意識＞ 水路の悪臭・廃棄物が流れてくる/煙は遠方から(福など)くる</p>	<p>＜生活と環境＞ 水路・運河なくなる</p> <p>＜公害の意識＞ 交通量増加</p> <p>(近年 貸し農園で菜園づくり、淀川でつりをするようになる)</p>

が多かった。戦前から盆と正月しか青空がみえないほど工場の煤煙はひどかった。昭和50年代大野川の埋め立て直前、最も川の汚染がひどく夏にメタンガスがわき不法投棄が増加した。

事例4(女性76才:大正10年福生まれ):親の世代の明治末期は大野川で米を洗った。漁師船は淀川の葦原に係留され、アサリ等が漁獲。イナゴはおやつだった。近くの広っぱでの菜の花見、コマ回し、トンボとり等の遊びや、淀川での水泳は昭和30年代までみられた。夫が昭和30年頃に喘息を発病、部屋の中が真っ

赤になるなど、昭和30年前後から公害が悪化したと記憶している。

【考察】昭和初年の川の水質はよく、淀川や大野川等の川辺での水遊びと空き地等での遊びが中心であった。事例1, 2, 4の生来居住者は漁獲とその調理法等地域伝来の生活文化に習熟している。戦前より大気汚染、戦後大野川の汚濁が進みながら、大野川より水質がよくなった淀川との結びつきが強いためか、淀川での水遊びが他地区よりも長く残っている。

④姫島地区 事例1(女性70才:大正15年姫島生まれ):昭和

図-2 口述により得られた遊び場の分布

初期、寺の境内、淀川でシジミとり、銭湯近くでイナゴとり等で遊ぶ。昭和30年頃水路が埋立てられ道路となり田畑も宅地化が進む。30年代には子供は路地や神社で遊び、水泳には兵庫県の武庫川や甲子園へ行く。40年代に淀川での水泳は学校で禁止される。60年代孫は公園で遊ぶ。昭和10年代高齢者に喘息がでていた。同40年代前半交通量が増大し青空がなく不快臭があった。当時は無自覚だったが気管支炎になり昭和63年公害患者に認定される。

事例3（男性67才：昭和5年姫島生まれ）：昭和10年代には淀川の木製栈橋の下で魚とり、ボート遊び、原っぱで野球をした。昭和30年代後半には空き地が減少し子供は外で遊ぶ習慣が減った。空気が悪いので子供達を武庫川等の郊外へ遊びに連れていった。

事例4（男性62才：昭和10年姫島生まれ）：昭和10年代には淀川のワンドや栈橋、水路の橋の下等で魚釣りをする。淀川の堤防は土で葦原があった。昭和20年代にワンドがなくなり、大野川には他の川の埋立の為生活排水が流入。30年代後半、蚊もトンボも減少し、宅地化が進んだ。夕方に金属性の塵が見えることがあった。40年代後半、長男は家か学校、次男は近くの公園で遊んだ。

事例5（女性49才：昭和23年姫島生まれ）：昭和30年代前半までは近所の路地や原っぱで石けり等をして遊ぶ。西淀中学位近の原っぱで草の首輪作り、路地でござを敷いて葉や貝でままごとをした。淀川でクローバー摘み、松下電器前の原っぱでヨモギ取りをした。原っぱにはトカゲ、ヘビ等がたくさんいた。淀川の花火大会の見晴らしがよく夕涼みにいった。子供達は放課後近所の駄菓子屋に集まり、夜には学校の宿直の先生の所に遊びに行ったりした。昭和35年頃までは町会の掃除の日や餅つきがあったが、近所の人の交流の場が減ってきた。50年代、子供は近くの原っぱに連れていった。昭和20年代は家の周囲は工場地帯で、洗濯物が汚れ悪臭は今よりひどかった。35年頃以降工場が転出し住宅が増え、車も増え排ガスが臭ったり路地が危険で子供が遊べなくなった。

【考察】淀川に隣接しているため川遊びが中心である。昭和10年頃までは泳ぐが、その後はワンド、栈橋での魚釣りやシジミとりから堤防の土手での草遊びと徐々に水から距離が開く。昭和20年代のワンドの消失、堤防の強化とともに、川辺での遊びは語られなくなる。昭和6年に始まった区画整理事業の進行とともに昭和30年代には田園は消失し原っぱや路地での遊びが目立つ。自然遊びの内容が、川遊びから原っぱでの草遊びなどに変わり、路地での町中遊びへの関心が高まってゆく。昭和40～50年代は宅

地化で空地も消失、遊び場は公園が中心になって行く。空気の汚染で野外での子供の遊びが敬遠されるようになる。また、事例5は昭和35年頃を境に近隣との交流が希薄になる様子を述べている。⑤柏花地区 事例1（男性72才：大正13年大阪市住之江区生まれ）：昭和4年に当地区内花川に転居。当時は一面田畑で、水路に舟を浮べる、トンボを追う、埋立用の土を運ぶトロッコを押す等して遊んだ。花川小学校周辺ではタンポポ等の花摘み、ベッタン・剣玉等をして遊ぶ。淀川本流に行く事は学校が禁じていたが入り江ではシジミとりをした。毎年4月町内会で淀川の土手で花見をした。学校の先生に毎週神崎川へ連れられていったが蚊が多かった。地区内に大きな池があり貸ボート屋もあったが遊ぶのは危険だった。昭和8年この池が埋め立てられ「満州原っぱ」とよばれるようになりそこで自転車競争をした。戦争中そこに高射砲陣地ができ戦後もしばらく跡があったが、住宅建設により原っぱは消失した。

事例3（女性67才：昭和5年野里生まれ）：小学校の帰りに「満州原っぱ」で露草を取って遊ぶ。大野川は汚くて流れがなく「危険」という理由で親が行かせなかった。住吉神社の横は土手で裏も鬱蒼としていた。境内の池にはカメがおり、ちょっとした広場で面白かった。戦前から工場は点在していたが、戦争中に大幅に増えた印象。昭和32年頃は空気も淀川もきれいで、男子は淀川で泳いでいた。公害が騒がれた40年頃も空気の変化を感じなかった。公害のイメージで古くからの住民が転居するようになる。

【考察】昭和初年、一体は田園地帯で、新淀川建設前にあった旧中津川の名残の池が残っていた。昭和11年から17年の区画整理事業に伴い、田畑、水路や池が埋め立てられ、土砂運搬用トロッコでの遊びはその様子を伝える。事業後の空き地が子供の遊び場となり、これを機に水遊びから原っぱ遊びが中心になる。池から満州原っぱへの転換、高射砲陣地の設置から戦後の宅地と工場建設の動きはこの地区の変化を典型的に示す。空地が豊富に残り昭和30年代ごろまで空き地や広場などの遊び場が確保されている。大野川は既に昭和10年頃から汚濁が進行しているが、公害に対する意識は昭和40年代以降に顕著である。

4. ヒアリング結果に基づく地域環境の変容過程に関する考察

3で得た口述内容が2章で想定した時代区分に対応しているか、環境と自然遊びの変化、公害の意識の点に着目して整理する(表-2)と、各時代の土地利用変化に対応した特徴がみられる。

【A：農漁村の時代(昭和10年頃まで)】この時代は、農村に工場の進出がみられるものの、なお川や水路の水辺の存在が生活と密接に関わっていた時代である。河川には葦原の浅瀬があり水泳や釣り等の川遊びが遊びの中心である。神崎川は下流では既に汚染されていたが、その中でも水泳を楽しむ様子が述べられた。釣りの獲物は食用資源になり、神崎川や淀川の堤防は花見の場でもあり、水系が生活と遊びの中心となっていた。その他に、虫とり、社寺林等での自然遊びの他、ビー玉等の土の上での遊びもみられている。昭和9年には公害がその一因となる農業の廃業があった。

【B：空き地の時代(昭和10年代～30年代半ば)】本格的に工場が進出し河川の汚濁が進行する。工業用地下水摂取による地盤沈下のための海水の逆流、大気汚染が農業を困難にする。区画整理事業の進行は農地の減少を進める。室戸台風、ジェーン台風の水害で農業は衰退し、その後堤防が強化され河川環境は変貌する。

神崎川は昭和12年頃汚染で水泳ができなくなり、大野川は昭和10年頃には上流の野里で臭気がするほど汚染が進行する。淀川で水泳が普通にみられるのもこの頃までで、ワンド、栈橋での魚釣りから堤防での草遊びと徐々に水から距離が開く。昭和20年代の堤防の人工護岸化により川辺での遊びは語られなくなる。淀川は汚染ではなく水辺の構造の変化による危険の増大により遊び場でなくなる。区画整理事業は、農地、水路、池の消失を促し

水遊びが減少するが、一方で空地の創出につながり原っぱや空き地での遊びが増大する。空き地での遊びにはスポーツの他草遊びや虫取り等の自然遊びもみられるが、これらはAの時代の自然遊びとは異なり、緑地の減少と生業の変化の過程で自然との関わりが後退したことを表している。この他、境内や路地での町なか遊び、昭和20年代には埋め立て地の土砂置き場での遊びもみられる。

公害に関しては、水質汚染とともに工場の煤煙による大気汚染が進行し、中島、佃、福・大野等北西部の地区では昭和10年代から煤塵の被害がみられ、昭和20年代にはさらに自動車騒音が重なるようになる。

【C：市街化と公害の時代（昭和30年代後半～40年代）】昭和30年には水没していた大阪湾岸の部分を除き、ほぼ全域が市街地となり、公害も激化する。市街化の結果、空き地が消失し、残っていた水路や川が埋め立てられ、遊び場は公園や学校、屋内等が主となる。福・大野のみ淀川での水遊びが残る。姫島、柏花の被験者では、この昭和40年前後に公害を強く感じたとする者が多く、区の東の内陸部での公害への意識が顕在化する特徴がある。

【D：公害緩和の時代】市街化と公害の時代にほとんど消滅していた、淀川河川敷等での自然遊びが2名の被験者にみられた。また、緑道や公園の草原等での遊びもみられる。

以上、客観資料で得られた4つの時代区分に対応した、異なる特徴をもった環境と生活の関わりが、確かめられた。

5. 総合的考察と今後の課題

(1) 地域環境の変容過程

2章にみた土地利用変化と、3章において得た個人史から得られた地域環境の変容過程に関する知見は次のようである。

①自然遊びの変容 土地利用変化から得られる時代区分に応じて、自然遊びの場所、ならびに遊びの内容の変化がみられた。

②公害の意識 柏花では、戦前から大野川の汚濁が早くから指摘される一方大気汚染の指摘は他の地区よりもやや遅いなど、地域によって、公害の意識が若干異なる傾向が見受けられる。被験者によって、昭和初期の公害と昭和40年前後の公害のどちらを強く記憶しているか違いがみられた。

③環境変容の契機 大きく地域を変えた契機として、台風による水害、区画整理事業等による田畑や水路・池の埋め立て、市街化

公害がある。中島の事例からは、工場からの公害が浸水被害を受けた際に地域全体に影響し農業を衰退させたと考えられる。ジェーン台風では淀川、第2室戸台風では神崎川の堤防強化工事により、それぞれ護岸が人工化され水辺が失われたことが聞かれた。区画整理事業は空き地を生じさせ、池や川の埋め立て等も水辺の消失と同時に空き地を生じさせる契機となった。市街化は空き地の消失を伴い、大気汚染は戸外での遊びを衰退させた。

戦災によって地域が大きく変化したのは被害の大きかった大和田のみで他の地区では変容の契機にはなっていない。

(2) 環境再生の手がかりについての考察

本研究で行ったヒアリング調査は、個人史、特に居住者の自然との関わりの記憶を集成し、それを地域資源として共有化することで、環境復元の方向性を探る作業として取り組んだものである。本論文は環境再生の目標になる可能性のある材料を居住者の記憶から収集した研究であり、具体的には、自然豊かな農漁村時代から空き地の時代にかけて、内容は変容しつつも多くの自然遊びが行われていたことが明らかになった。限られた空地・緑地を活用して再生に取り組まざるを得ない現状にあって、農漁村の自然の再生は困難であるが、空き地や湿地の再生には可能性があり、これは居住者にとってもかつて体験してきた環境との関わり的一端を復元できるという意義があると思われる。これは、現在進行中の他の研究成果²⁾と照合しつつ実際のまちづくりに織り込まれることが求められる。

居住者の計画策定への参加は、立案過程のみならず、このようなヒアリング調査を通じた意識発掘、課題発掘から始められる必要がある。特に環境復元活動への広い理解と積極的参加を期待する場合この作業は重要な取り組みとして位置付けられると考える。

(3) 今後の課題

環境再生の手続きはここで得られた様々な環境と生活の関わりのある方を再び居住者に示し、再生可能性を検証しつつ、再生目標として居住者自ら選択していく段階であると思われる。また、個人ヒアリング調査で、生来居住者と転入者の間の認識の差異に言及する被験者が複数例みられた。このような居住者の属性による公害被害の認識の違いについては本研究の範囲では未解明であり今後の課題である。（本研究はトヨタ財団の助成研究である）

補注・文献

- 1) 「企業との和解にあたっての裁判所の見解と和解条項」大阪地方裁判所第9民事部裁判長裁判官井垣敏生、1995年3月2日、による。
- 2) 働き地域再生センター（1997）：年次報告書Vol.1：8-9。財団設立と前後して着手された再生事業は環境庁委託や他財団の助成研究、自主事業等24テーマにもなり本研究はその1つである。他に公害患者のリハビリテーション、公害史収集、道路公害対策に向けた研究等がある。
- 3) 「財団法人公害地域再生センター設立趣意書」1995年による。
- 4) 木下勇・他6名編（1991）：街がぼくらの学校だ！－子どもの遊びと街研究会の活動の記録－：子どもの遊びと街研究会、96pp
- 5) 寺本潔（1994）：子どもの遊び場の三世代変化：子供の知覚環境－遊び・地図・原風景をめぐる研究、49-84、地人書房
- 6) 水野節夫（1986）：生活史研究とその多様な展開：青井和夫監修「社会学の歴史的展開」

149-208、サイエンス社

- 7) 佐藤健二（1995）：ライフヒストリー研究の位相：中野卓・桜井厚編「ライフヒストリー社会学」13-41、弘文堂
- 8) 松平 誠（1992）：神田の地上げと生活集団：生活学1992、159-190、ドメス出版
- 9) 鈴木 晃（1987）：独居老人の創出過程と住居移動：生活学1987、152-196、ドメス出版
- 10) 桜井 厚（1993）：方法論としての生活史：講座生活学3、90-120、光生館
- 11) 現在の小学校区、患者会の支部単位がほぼ一致し、地域社会のまとまりとして把握しやすいことから、中島、佃、大和田・出来島（千舟を含む）、福・大野、姫島、柏花（花川、野里、柏里を含む総称）、竹島・御幣島の7区分を採用した。このうち、福と大野は患者会支部や小学校区が異なるものの、地理的に近接し、もと漁村集落であるという顕著な共通点があるため本論文内では1地区として扱った。
- 12) 集団ヒアリング対象者77名の内訳は、男22

名女55名、公害患者37名、74名が生年は明治43～昭和10年で、3名は戦後生まれである。

- 13) 本研究では「自然遊び」を「自然を活用した遊び」と定義している。
- 14) 明治44年1/20000、昭和6年1/25000（陸地測量部）、昭和22、30、44、46、49、55、60年の1/25000地形図（国土院）を用いた。
- 15) 働大阪都市協会編（1996）：西淀川区史：西淀川区制70周年記念事業実行委員会発行、513pp
- 16) 小山仁示（1988）：西淀川公害－大気汚染の被害と歴史－：東方出版、254pp
- 17) 文献16）、65-67
- 18) 文献16）、71-82
- 19) 文献15）、234-241 区画整理事業組合の設立・解散時でみると、佃昭和3-21年、竹島・御幣島昭和5-21年、姫島昭和6-35年、中島（工業団地部分）昭和7-14年、野里昭和11-17年に行われ、大和田は昭和13年に始まり途中から戦災復興区画整理となり昭和34年終了。

Summary : The purpose are to find a changes of inhabitants' environmental awareness in Nishiyodogawa ward, where suburban agro-fisherman village had been transformed in industrial, thus pollution-damaged area, and to get hints from them to rehabilitate the area. The awareness was interviewed in groups and individually in 7 neighborhoods regarding their 1) life histories, 2) memories of out-side play, and 3) that of pollution and damage. Environmental deterioration caused them not only the change of the lifestyles but also their sensibility to the nature. Their sensibilities were clearly differed in each generation with lifestyles and plays in 4 periods. The awareness on local environment, analyzed by periods in each neighborhood is closely related to their childhood. It is to say an environmental consciousness was formulated through their life histories. Their desires to rehabilitate the area have various aspects that include some realistic solutions.